

中国の正月である「春節」が今年もやってきた。春節期の帰省ラッシュの「三大流」である「民工流」、「学生流」、「探親流」が一斉に帰省した。主流である「民工流」は「一年の収穫」を携えてそれぞれの故郷に戻っていく。なかでも「都市新人」と呼ばれる若者は「彩電(カラーテレビ)」や「電腦(パソコン)」を「一年の収穫」として持ち帰る。こうして、春節期には「一年の収穫」とともに都市の生活スタイルという「新たな観念」がそれぞれの故郷にもたらされることになる。上海の若い女性が持ち帰る都市の「生活スタイル」の一つは『上海服装』というファッション雑誌である。『上海服装』は流行のファッションを紹介するほか、華やかな都市の生活スタイルを読者に提供する。

上海におけるファッションの多くは「日本熱」につつまれている。十代後半、二十歳前後の若い女性のファッションリーダーは「浜崎あゆみ」だという。海外ブランドをカジュアルに着こなす彼女のスタイルが上海ファッションをリードする。二十代後半の女性は日本のファッション雑誌『Oggi』や『Ray』を愛読する。外国語専門の書店のみならず、露天の「書報亭」でも『Oggi』の中国語版が置かれていた。

一方、淮海路や南京西路に出店する日本のアパレル・メーカーは、欧米のそれと比べて出遅れていると言えるかも知れない。「日本熱」の盛んな上海では、『Oggi』や『Ray』を通じて「Up to Date」で「東京スタイル」が伝えられる一方で、日本のブティックには「1年遅れ」の「東京スタイル」が並ぶにすぎない。日本のファッション雑誌にあふれる「東京スタイル」を真似できても、「本物」のそれに身をつつむことは至難の業である。日本のブティックを訪れる女性客はファッション雑誌を片手に本物の「東京スタイル」がないことに不満を述べるという。

ファッションにおける「日本熱」は、思わぬ波及効果をもっているようである。『Oggi』や『Ray』を片手に日本のブティックを訪れる女性客の多くが、片言ではあるが日本語を話すのである。彼女たちの興味は、おもにファッションや芸能にあるが、関連メディアを通じて日本語に触れる。日本のファッション等に興味をもつ韓国人の友人の一人も、ファッション雑誌を読むうちに日本語を覚え、今では簡単な会話ができるようになっていたことを思い出した。日本のファッション・芸能は、意外と大きな影響力をもっていると実感してしまう。相互理解の出発点が興味と関心という点にあるなら、身近なところにその「カギ」はあるようだ。また、都市の「生活スタイル」の一つとしての「東京スタイル」が、上海の周辺地域に波及する可能性がないわけでもない。日中協力の実績の「過度な誇示」よりも、日本のファッションショーを上海でする方が、若者の興味と関心を日本に引き寄せることになるというのは慌言であろうか。

* 『(財) 霞山会派遣留学生同窓会 NEWS LETTER』第6号(2002年4月15日) 4-5頁。